

01	名古屋	名古屋市立明正小学校	ニシダ エリナ 西田 衣里那
分科会番号	7	分科会名	美術教育

研究題目

「もっと！」を引き出す造形活動

研究要項

I 研究のねらい

本学級の子どもは、毎週の図画工作科の時間をとても楽しみにしている。授業前には「やったー図工だ」「今日は、何をつくるの?」といった発言が多く聞かれ、前向きに活動に取り組もうとする姿勢がうかがえる。しかし、いざ授業が始まり作品づくりに取り掛かると、「これで完成でいいや」「別のものをつくる」と作品づくりに飽きて活動をやめてしまう子どもも多く、活動への集中力が徐々に薄れてしまう様子が見られる。子どもたちには、表すことを楽しみ、形や色を工夫しながら「つくる」「つくりかえる」「つくりあげる」経験がまだ十分ではないのではないかと考えた。

そこで本研究では、子どもの内発的動機付けにより授業の様々な場面で「もっと!」(「早くやりたい」「もっとこうしたい」「もっとやりたい」という姿を引き出すことを通して、子どもが満足のいくまで夢中になって活動に取り組み、表現への関わりを深めていく姿を目指す。本研究では、以下の3点を指導の重点として掲げ、実践を進めていく。

【指導の重点】

【重点1】 材料との出会い『出合いに乾杯タイム』

何をつくるかをあえて伝えずに、材料との出会いからスタートすることで、「早くやりたい」という題材への期待感をもち、活動への意欲を高めることができるようにする。

【重点2】 材料と関わり、表現の仕方を考える『ちょこっとおつまみタイム』

表したい形に着目できるよう、あえて単色の絵の具を使用し、個人ごとに限られたスペースで活動を行う。これにより、表現の仕方を考え、「もっとこうしたい」と表現の幅を広げることができるようにする。

【重点3】 満足がいくまでつくり続ける『まだまだおかわりタイム』

子ども同士が自然に関わり合えるような場を設定し、体全体を使って夢中で活動できる環境をつくることで、子どもが手や体全体の感覚を活かしながら、「もっとやりたい」と夢中になって表現できるようにする。

II 研究内容(対象:第1学年 22名)

1 題材について(題材名「ぺったんコロコロ」)

本題材は、空き容器や段ボールなど、身近にある様々な材料や用具を用いて、画用紙に「ぺったん」したり「コロコロ」したりしながら、思い思いに表現を楽しむことをねらいとしている。子ど

もが、手や体全体の感覚を使いながら思い付いた方法で形を写し取り、その形や色の面白さを味わうことができるようにしたい。同じ材料でも、「ぺったん」したり、「コロコロ」したりする向きや力の入れ方、転がし方によって異なる形になるため、偶然の表現の面白さにも気付くことができる。また、形の重なりだけでなく、色が重なり合うことによって生まれる色の変化にも気付くことができ、造形的な見方・考え方を働かせることができるようにしたい。

2 活動の様子

【重点1】 材料との出会い『出会いに乾杯タイム』

はじめに、教師自身が今回の題材に適した道具や材料を様々試した。その結果、子どもたちがスタンプしたり転がしたりしやすく、面白い模様ができそうな材料を選ぶことができた。

授業では、材料との出会いを特に大切にしたいと考え、子どもたちには学習の内容を伏せたまま、教師が試した中でよいと思った材料を保護者に伝え、約1か月かけて空き容器やトイレットペーパーの芯などを集めてもらった。また、他の教職員にも協力を依頼し、多種多様な大量の材料を揃えることができた。

集めた材料（一例）

- ・トイレットペーパーの芯 ・毛糸 ・割りばし
- ・キャップ ・カップ ・洗濯バサミ ・ボタン
- ・段ボール ・果物を包むネット ・気泡緩衝材



授業当日には、子どもが持参した材料をグループの机いっぱいに広げて【資料1】、形や大きさなど材料の特長を鑑賞しながら、友達と意見を交わした。「丸い形のものがあったよ」と、楽しそうに話す姿が多く見られた。それぞれのお気に入りの材料を見付けて発表する活動では、一人一人が材料と主体的に向き合う姿が見られた。

その後、教職員が集めた材料を子どもたちに披露すると教室は大きな歓声に包まれ、子どもたちの関心は一層高まった。続いて、「今日この材料でどんなことをしてみたいか」を話し合ったところ、「並べてみたい」「組み合わせて大きなロボットをつくってみたい」などの自由な発想が次々と飛び出した。

最後に、私がスタンプ台を使って、実演を行い、初めて今回の題材がスタンプ表現であることを明かした。子どもたちは「早くやりたい」と、期待に胸を膨らませていた。

【重点2】 材料と関わり、表現の仕方を考える『ちょこっとおつまみタイム』

【重点2】では、形に注目させることをねらい、あえて単色（黒）の絵の具を用い、四つ切り画用紙に個人でスタンプ表現を行った。子どもたちは、様々な材料を自由に試しながら、画用紙いっぱいに思い思いの模様を試していた。

中には、お気に入りの材料を見付けて何度も繰り返しスタンプする子ども【資料2】や、友達と「これを押したらどうなるかな？」と話しながら一緒に試す子どもの姿も見られた。



活動の途中で、いろいろな太さに切っておいた、段ボールや気泡緩衝材などの材料を追加し、トイレットペーパーの芯に気泡緩衝材を巻き付けてコロコロすると、面白い模様ができることを教師が紹介した。まず一人の子どもにローラーづくりを実際に試してもらい、その様子を全体に伝えたところ、「それやってみたい」「他の芯にも巻いてみよう」などの声上がり、友達の工夫を取り入れたり、自分らしい工夫を広げていったりする姿が見られた【資料3】。一人の活動を起点として、子どもたちそれぞれの工夫がさらに深まった。

活動の最後には、グループ内で模様を見せ合いながら互いの作品を鑑賞し、形の面白さや違いを共有した。また、それぞれの作品を教室に掲示し、いつでも見返せるようにすることで、表現の幅をさらに広げることができるようにした。

活動後、子どもたちに「次はどうしたい？」と尋ねたところ、「もっと大きな紙でやってみたい」「もっとたくさんの色でやってみたい」といった「もっと！」という声が多く上がった。

【重点3】 満足がいくまでつくり続ける『まだまだおかわりタイム』

【重点3】では、子どもたちの声を受けて、模造紙を何枚もつなぎ合わせた大きな画面を用意し、赤・黄・青・白の4色の絵の具を準備した。模造紙は、あえて床に敷き、複数の子どもが関わりながら、手や体全体を使って活動できるようにした。

図工室に入った子どもたちは、部屋の隅から隅まで敷かれた画面を見て、「わあ、面白そう」と目を輝かせていた。活動が始まると、多くの子どもが両手に絵の具をつけて手形を押し始めた。最初は右手に黄色、左手に青色など、別々の色で手形を押ししていたが、やがて手をこすり合わせて「緑になった」と混色による色の変化に気付き、楽しむ様子も見られた。

中には友達と一緒に「これ足につけてみたらどうなるかな？」と話しながら、手だけではなく足も使って模様をつくる姿も見られた【資料4】。活動が進むにつれ、表現が手から足、全身へと自然に広がっていく様子が印象的であった。

また、【重点2】での活動を思い出して、様々な色で材料の形を写していったり、材料を組み合わせる模様をつくったりする姿が見られた。

目の前の活動に没頭するあまり、視野が狭くなってしまわないよう、小さな踏み台を設置し、模様全体を見渡しなが表現を進められるよう環境づくりを行った。何度も台に登って模様を見直す子どもや【資料5】、「君も乗ってみたら？」と友達に声を掛ける姿からは、活動への主体的な関わりと友達との協働の様子がうかがえた。

毛糸を巻いてみよう！



【資料3】 工夫をする様子

足につけてみよう！



【資料4】 足形を押す様子

きれい！いいね！



【資料5】 台に登る様子

子どもたちは最後まで夢中になって活動に取り組み、「もっとやりたい」「まだ終わりにたくない」といった声も聞かれた。活動後には、自分のお気に入りの模様を探し、紹介し合う場面を設けた【資料6】。自ら選んだ模様をうれしそうに友達に伝える姿からは、達成感や満足感を味わっているようだった。



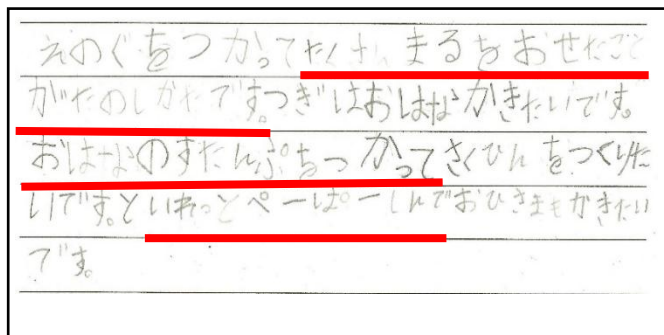
Ⅲ 成果と課題（成果：○ 課題：●）

【重点1】 材料との出会い『出会いに乾杯タイム』

- 「今日はどんな活動をするのか」といった導入の説明をせず、多種多様な大量の材料との出会いから活動を始めたことで、子どもたちの興味関心を強く引き出すことができた。
- 材料をじっくり観察することで、「これ面白そうだから早くやりたい」といった発言が多く聞かれ、活動への期待感が自然と高まった。

【重点2】 材料と関わり、表現の仕方を考える『ちょこっとおつまみタイム』

- 一人一人に四つ切り画用紙を用意し、たくさんの材料を自由に使える環境を整えたことで、それぞれが自分の思いを「もっと！」と表現することに集中できた。その結果、材料の形や大きさ、形の組み合わせに気付き、「もっとこうしたい」という発想につながった【資料7】。

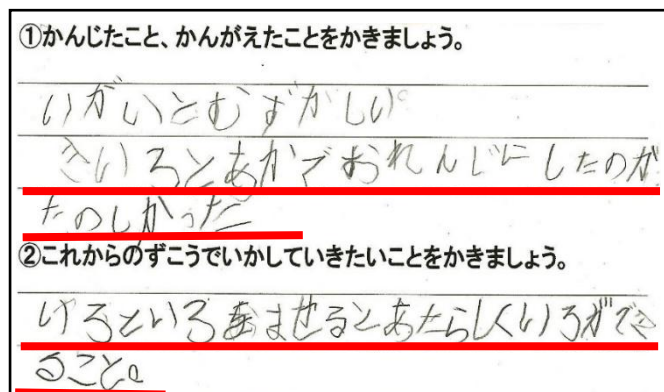


【資料7】 重点2の感想

- 表現に使う色を黒一色に限定したことで形に注目できた一方、模様を重ねていくと下の模様が見えづらくなってしまった。重ねても下の模様が透けて見えるように、茶色やグレーなど、より薄い色を選んでもよかったと感じた。

【重点3】 満足がいくまでつくり続ける『まだまだおかわりタイム』

- 思い思いに表現できる広い画面と色を用意したことで、子どもたちは納得のいくまで表現を続けることができ、「もっとやりたい」という意欲を自然に引き出すことができた。
- 混色による色の変化や材料の組み合わせによる模様の面白さに気付くことができた【資料8】。



【資料8】 重点3の感想

- 活動が手形や足形に集中する傾向が見られたため、材料を活用することで表現の幅が広がるように、材料の配置や子どもの動線を工夫し、自然と材料にも目が向くようにする必要があった。
- 子どもたちの表現の幅をさらに広げられるように、活動の途中で面白い模様を生み出している子どもがいたら、子どもたちを注目させ、価値付けをし、「どうやってこの模様をつくったと思う？」と問い掛けるとよかった。

IV 研究のまとめ

本研究では、子どもたちの「もっと！」を引き出すために、材料との出会いに期待感をもたせる導入や、自由に表現を試す活動、そして満足がいくまでつくり続ける場の設定を工夫した。その結果、子どもたちは思いを途切れさせることなく、夢中になって活動に取り組む姿が見られた。また、混色の面白さや素材の組み合わせによる模様の変化に気付くなど、活動を通して多くの造形的な気付きも生まれていた。

一方で、自分の気付きや思いを言葉で表現し、友達と共有することには難しさが見られた。今後は、子どもたちが主体的に関わり合えるような場の工夫や声掛けをすることで、子どもたちの表現がさらに深まり、学びが広がっていくと考える。

今後も子どもたちの「もっと！」という意欲を授業の様々な場面で引き出しながら、つくる、つくりかえる、つくりあげる経験を積み重ね、満足がいくまで夢中になって活動に取り組み、表現への関わりを深めていく子どもを育てていきたい。